

実体と既知性と指示表現

山田仁子

序

本稿では、実体 (entity) と既知性 (givenness) と指示表現を、おのこの項目について、また各項目どうしの関係について、検討する。

実体、既知性、指示表現という三つの概念は、従来多くの文献において、互いに関連づけて取り扱われてきた。特に Prince (1981) を始めとする、既知性の研究においては、一つの実体の既知性がどのようなものになっているか、またその既知性に対してどういった指示表現が対応しているか、という視点から研究がなされている。しかし、第一章でも示すように、この実体—既知性—指示表現の構図に対して疑問を投げかける現象が存在する。

本稿では以下、一章でこのような現象を提示し、二章で実体—既知性—指示表現の構図を検討しなおして、一章で挙げた現象に対する説明を求めたい。

1. 実体—既知性—指示表現

一つの実体が談話に導入され、指示が繰り返される時、その実体の既知性は次第に高まる。また一つの実体の指示表現は、一般には不定表現から定表現、さらに代名詞へと変化する。したがって、最も低い既知性は不定表現に、より高い既知性は定表現、さらに代名詞という表現形式に反映されるものと予想される。

次の例(1)~(3)に見られるように、指示表現が代名詞から定表現や不定表現、また定表現から不定表現と、一般的な順序に反する場合には、通例その指示物が同一の実体であるとは、解釈され難くなる¹。

- (1) i) Once *a man_i* loved her. *He_i* gave her a valentine.
 ii) Once *a man_i* loved her. *The man_i* gave her a valentine.
 iii) *Once *a man_i* loved her. *A man_i* gave her a valentine.
- (2) i) *The man_i* loved her. *He_i* gave her a valentine.
 ii) *The man_i* loved her. *The man_i* gave her a valentine.
 iii) **The man_i* loved her. *A man_i* gave her a valentine.
- (3) i) *He_i* loved her. *He_i* gave her a valentine.
 ii) **He_i* loved her. *The man_i* gave her a valentine.
 iii) **He_i* loved her. *A man_i* gave her a valentine.

これは一つの実体が繰り返し指示され、既知性が高まっているにもかかわらず、低い既知性に対応する指示表現が現われているためと考えられる。

しかし、(1)~(3)の例とは対照的に、次に挙げる例では、指示表現が一般的な順序に逆行して現われているにもかかわらず、同一の人物や物を指示していると解釈される。

- (4) Perhaps more important, *he_i* will probably make the meeting *his_i* political last hurrah. *The aging leader_i* has repeatedly said he hopes to resign his post. (*Time*, 21 Sep. 1987, p. 13)
- (5) (天皇崩御の記事中 *Japan_i* が繰り返された後)
In a land where wives are rarely seen in public with their husbands_i, he seemed to derive some of his greatest pleasure from strolling around the palace grounds with Nagako.
 (*Time*, 16 Jan. 1989, p. 10)

また、同様の状況にあることから、実体自体の既知性に差はないと思われるにもかかわらず、指示表現が異なる場合がある。次に挙げる(6)の“the waitress”と(7)の“an elderly waiter”は、こういった例の一つである。

- (6) ... she turned into a local café. ... She crossed the café, and made her way to an empty table ... *The waitress* drifted up. Mrs. Oliver ordered a cup of coffee and a Bath bun ...

(*Third Girl*, p. 57)

- (7) ... we passed the threshold of The George (=レストラン) ...

We were directed to the coffee-room ... *An elderly waiter* attended to us, a slow, heavy-breathing man. ...

(*Dumb Witness*, p. 51)

(6)の“the waitress”の指示する人物と、(7)の“an elderly waiter”の指示する人物は、共にここで初めて指示を受け、談話に導入されている。どちらも共に、レストラン（あるいはカフェ）において給仕する人間という点で一致しており、また先行談話において場面がレストラン（あるいはカフェ）であることが示されているという点でも、人物の置かれている状況に差は見られない。よって、これら二人の人物の既知性に、差を見いだすことはできない。だが、その指示表現は、(6)では定表現、(7)では不定表現となっているのである。

以上、(4)～(7)のような例が存在するという事実は、従来の既知性に関する理論、つまり一つの実体が指示を受け、既知性が高まる、また、既知性の程度に指示表現が対応する、という理論を、不確実な疑わしいものにしてしまう。

続く二章では、この従来からの、実体－既知性－指示表現、という構図を検討し直す。まずこの構造に含まれる各構成素を、次に各構成素間の関係を検討する。そして、従来の理論のままで説明できた(1)～(3)の例も、従来の理論に反すると思われる(4)～(7)の例も、すべてを説明できるよう、理論をより明確なものにしていきたい。

2. 構図の見直し

実体－既知性－指示表現の構図全体を見直すためには、まず各構成素を、次に各構成素間の関連性を見直さねばならない。しかし「指示表現」に、再検討の余地がある定義づけは含まれていないので、検討すべき対象としては、「実体」と「既知性」の二つの構成素のみとなる。ただし、この二つの概念は、指示表現との関連において検討される。実体とは、指示表現により指示を受ける対象であり、既知性とは、指示表現の形式に反映されるものである。こうした言語現象との関わりを無視しては、言語研究において、実体や既知性といった概念を立てる意味がなくなるであろう。実体と既知性の概念を検討するということは、また同時に、実体と指示表現、既

知性と指示表現の関係を検討することにもなるのである。よって、実体—既知性—指示表現という三構成素からなる構図を見直すには、三つの構成素、三つの関連性、それぞれについて全てを検討する必要はなく、実体と既知性という二つの構成素と、実体と既知性の関連性の、合計三点について検討すれば十分である。

本章では以下、一節で実体について、二節で既知性について、残る三節で実体と既知性の関連性について検討する。

2.1. 実 体

本節では、指示表現が指示する実体とは何であるかを、明らかにする。

指示表現により指示を受ける物としては、現実世界に存在する事物が、まず当然考えられるが、他に、想定された世界に存在する事物も、指示を受けると思われる。その例を次に挙げる。

(8) If Mary has *children_i*, *they_i* must be cute.

(9) When *a new lady_i* came Miss Arundell was always interested to start with—about *her_i* life and *her_i* childhood and where *she_i*'d been and what *she_i* thought about things ...

(*Dumb Witness*, p. 63)

(8)の“children”, “they”の指示する人物は、if節により設定される想定の世界にあるものである。(9)の“a new lady”, “her”, “she”の指示する人物も、現実世界の特定の人物を指示しているわけではない。“always”という語が示すように、何度も繰り返された出来事の一つを、任意に取り出して想定した場面に存在する人物である。現実世界の特定の人物を指示しているわけではない。言語使用者の意識に存在する想定の世界の事物も、指示表現の指示を受ける実体となると考えられる。

しかし、現実世界の事物を指示する場合の現実世界というのも、言語使用者から切り離された所に存在するものではない。言語使用者が捉えたものであり、広い意味で想定された世界の一つである。

しかし、このような、現実世界も含めた想定の世界の事物が、指示表現の直接の指示を受けているとは考えられない場合がある。もっとも、先に挙げた例(8)の代名詞“they”は、if節により想定された世界において、

“children”という不定名詞句によって、存在が確立された実体を指示しており、また例(9)の代名詞“her”, “she”は、when節によって想定された世界において、不定名詞句“a new lady”により存在が確立された実体を、指示していた。しかしながら、次の例においては、指示表現を、それが指示すると見える事物そのものに置き換えてしまうと、意味を成さないか、あるいは、伝わる意味が損なわれてしまう。

(10) *The British Prime Minister is the leader of the Tory Party.*

(Johnson-Laird, p. 108)

(11) (アメリカの黒人差別の記事中)

In a nation where for centuries being black almost always meant being poor, prosperity itself can seem like a departure from tradition.

(Time, 13 Mar. 1989, p. 37)

(10)の二つの名詞句の指示物を、現代の言語使用者が捉えるであろう現実世界に求めれば、それはともにサッチャー女史となる。しかし、両方ともをこの現実の人物に置き換えてしまうと、この文は、「サッチャー女史はサッチャー女史である」となり、全く意味を成さない（この場合、トートロジーが伝える意味もない）。また、(11)の名詞句については、現実世界のアメリカが対応するのだが²、この場合も、アメリカそのものに置き換えると、この文の本来の意味の少なくとも一部は、損なわれてしまう。

(10), (11)の名詞句が現実の事物に置き換えられないということは、名詞句がいずれも、現実世界の事物を、少なくとも直接には指示していないことを意味する。これらの例においては、名詞句の部分に現実世界のいかなる事物が当てはまるかということよりも、名詞句内に含まれる意味の方が重要な位置を占めている。これらの名詞句が直接に指示しているのは、現実を含め想定された世界の事物ではなく、名詞句内の意味の示す役割あるいは性質を持つものとしての存在であると考えられる。こうした存在は、物理的に世界を構成するものではなく、人の意識に捉えられる存在なのである³。

指示を受けるのが、意識における存在であるとする、現実の物理的状況では、一つのものでしか有り得ないものも、意識においては、複数個の異なる存在となって、おのおの独自に指示を受けることが可能となる。先

に見た例(10)がこれに相当する。二つの名詞句に当てはまるのは、現代の世界では同じ一人の人間であるが、指示表現として指示するのは、おのおの異なる役割を持つものとしての、異なる存在なのである⁴。

ここで実体について、統一的説明を求めるならば、実体とは、すべて、意識における存在だということになる。現実の事物をそのまま指示しているように見える場合でも、それは、“事物”として捉えられた、意識における存在を指示していると考えられる。一つの事物として捉えられる存在も、役割として捉えられる存在も、同じように指示を受ける実体として、意識に含まれるのである。

2.2. 既 知 性

本節では、既知性について検討する。

既知性については、従来様々な取り扱い方がされてきた⁵。結びつく対象も、事物の場合もあれば、命題の場合もある。定義や用語についても統一してはいない。整理されるべき重要な問題ではあるが、本稿では便宜的に、聴者の意識に存在する実体に与えられ、指示表現を規定するものとして、取り扱うこととする。

指示表現の形式（不定名詞句、定名詞句、代名詞）の現われ方を規定するものとしての既知性は、二つの要因により成り立つと考えられる。指示物の意識への密着性と、意識における唯一性である（ただし、共に、話者が聴者の意識の状態について、想定するものである）。

意識への密着性は、三種類に分けられる。

- 0：意識に存在もしないし、意識内の他の実体に関連づけられもしない
- 1：意識内の他の実体に関連づけられる
- 2：意識内に既に存在する

この三種類の意識への密着性は、次の例に見られるように、三種類の指示表現の現われ方に反映する。

(12) *There was a man and a woman.*

They lived in a remote valley.

(13) ...He hailed a taxi.

“Durham Hotel, Bloomsbury,”

he told *the driver*.

(*Dumb Witness*, p. 137)

(12)で指示される人物は、初め全く指示を受けない段階では、密着性が0のタイプで、不定名詞句で指示される。一度指示を受けると聴者の意識に導入されてしまっているため、密着性はタイプ2になり、代名詞で指示される。(13)で“the driver”という役割を持つ実体は、前に導入され、意識内の実体となっている“a taxi”の指示物に関連づけられるので、密着性はタイプ1で、定名詞句で指示される。

タイプ1の密着性について述べた、意識内の他の実体との関連づけが成り立つ場合というのは、少なくとも二つある。一つは、上に見た例(13)のような場合で、既存の他の実体に、物理的あるいは機能的に結びつく。たとえば、“steering wheel”で示される実体は、“car”で示される実体に、また、“roof”は“house”で示される実体に物理的に結びつき、“chef”や“waiter”で示される実体は、“restaurant”という場所に、機能的に結びつけられる⁶。

もう一つは、こちらの方がより一般的であるのだが、同一性による関連づけである。一章で挙げた例(4)や次に挙げる(14)が、これに当たる。

(14) The Emperor Ho Sin had a dream in which ...

Chastened, Ho Sin looked into a mirror and instead of seeing his own reflection, he saw a man named Mendel Goldblatt ...

When *the emperor* awoke he was in a cold sweat and couldn't recall if he dreamed the dream or was now in a dream being dreamt by his bail bondsman. (*Without Feathers*, p. 181)

ここで注意しておきたいのは、定名詞句の場合の同一性による関連づけというのは、代名詞の場合の同一指示とは、区別されるべきものだという点である。代名詞の場合は、既存の実体を直接的に指示するのに対し、定名詞句の場合は、直接的には新しく、あるいは改めて、役割としての存在を指示し、既存の実体との同一性は、間接的に示されるのである。

二番目の要因である唯一性が指示表現に反映することは、次の例により明らかである。

(15) John waved *a hand*.

(16) John opened *the mouth*.

上の二例の指示物は、聴者の意識への密着性については、共にタイプ1である。‘John’という既に意識内に導入されている実体に、関連づけられる。ここで指示表現の違いの原因となっているのは、‘John’という人間に関連づけられ‘hand’（手）という意味に当てはまる物が、二つあるのに対し、‘John’に関連づけられ‘mouth’という意味に当てはまる物は、一つしかないという点である。

以上の、既知性の二つの要因——意識への密着性と唯一性——の組み合わせにより、指示表現は決定される。これを表にすると、次のようになる。密着性の0, 1, 2は、先に分類した、タイプ0～2を示し、唯一性の0, 1はそれぞれ、唯一性が成立してないこと、成立していることを示す。

| 意識への 密着性 | 意識における 唯一性 | 指示表現 |
|-------------|---------------|-------|
| 0 | 0 | 不定名詞句 |
| 1 | 0 | 不定名詞句 |
| 2 | 0 | —— |
| 0 | 1 | —— |
| 1 | 1 | 定名詞句 |
| 2 | 1 | 代名詞 |

ただし、密着性と唯一性が、2-0, 0-1の組み合わせについては、このような組み合わせが存在するのであれば、指示表現は不定名詞句となると予想されるのではあるが、組み合わせ自体が、あり得ないのではないかと思われる。この問題は今後の課題としたい。

2.3. 実体と既知性

本節では、本章の一節で見た実体と、二節で見た既知性の関連づけを試みるが、これにより、一章に挙げた、従来の理論では明確な説明が得られなかった例も、説明可能となる。ここで一章で挙げた例も含めて、幾つかの例を検討してみる。

(17) (= (4)) Perhaps more important, *he* will probably make the

meeting his political last hurrah. *The aging leader* has repeatedly said he hopes to resign his post.

- (18) *His Christian faith, he says, is “No. 1 in my life.”* Earlier this year, *the trim 155-pounder, whose denim shorts are specially tailored by Nike*, skipped Wimbledon because, he insists, “I want to get stronger.” (Time, 15 Aug. 1988, p. 51)

- (19) (= (5)) (天皇崩御の記事中 *Japan* が繰り返された後)

In a land where wives are rarely seen in public with their husbands, he seemed to derive some of his greatest pleasure from strolling around the palace grounds with Nagako.

- (20) The ascendancy of the knowledge worker is reflected in the ascendancy of the tool — *the computer*. It has been a long time since *a child of technology* has had such a profound effect upon our lives and our society. (Fifth Generation, p. 13)

(17), (18)では代名詞から定表現, (19), (20)では定表現から不定表現という順で, 指示表現が現われているが, ここに当てはまる物を, 現実世界に求めるならば, それはどの例においても, それぞれに同一のものとなる。現実の事物そのものに対して, 既知性が与えられるとするのであれば, 以上の例では, 既知性の変化と, 指示表現の変化が, 一致していないことになってしまう。しかし, 本章第一節で論じたように, 指示表現が指示するのは, 人間の意識に捉えられる存在である。現実世界では一つの事物でも, 意識においては, 別個の存在となり得る。上の(17)~(20)における指示表現も, 現実世界では同一でも, 意識においては別個の実体を指示しており, この別個の実体それぞれに対して, 指示表現が与えられているのである。

(17), (18)における定名詞句は, 現実世界では先行の代名詞が指示する人物に重なりはするが, “aging leader” という性質や, “trim 155-pounder, whose denim shorts are ...” という姿を持つ人物という, 新たな視点から捉えられた, 言語使用者の意識においては別個の存在を, 指示している。表現形式が定名詞句になっているのは, この意識における存在の既知性が, 二節で見た, 意識への密着性 1, 意識における唯一性 1 のものであるためである。密着性 1 というのは, 意識内の実体に関連づけられるということ

だが、ここで関連づけられる実体は、先行の代名詞が指示する実体である。その関連づけの種類は、二つの実体に同一性があるということになる。

(19), (20)の不定名詞句も、先行談話に既出の事物、既に意識にある実体とは別個に、意識においては新たな実体を、指示する。既存の実体との関連もないものとして、捉えられているため、意識への密着性0で、指示する表現形式は不定名詞句になっている。

次の例(21)では、二つの指示表現が、現実世界での指示物の重なりを暗示しながらも、直接に指示するのは別個の実体であることが、さらに明らかである。

- (21) Roces unexpectedly used the occasion to denounce “compromises and deals” in *the government’s* anticorruption program. “We cannot afford a *government of thieves*,” he warned.

(*Time*, 22 Aug. 1988, p. 10)

Roces 氏はこの発言の後で、フィリピン政府のことを言っているのではないと、続けることも可能である。二つ目の指示表現である不定名詞句は、先行する指示表現の定名詞句が指示するところの、既存の実体 (=フィリピン政府) に関連づけられる実体—つまり間接的にもフィリピン政府—を直接には指示しておらず、いかなる実体とも無関係に、新しい実体を指示しているからである。また、この不定名詞句が含まれる文は、現実の具体的な出来事を述べるのではなく、一般的性格を持つ叙述であり、不定名詞句の指示物も、“government of thieves” という性質 (役割) を持つ一般的な“類”としての不特定な事物であると解釈されるが、この解釈は、不定名詞句という表現が、フィリピン政府など、それまでに意識内に導入されている事物とは切り離して、事物を新たに指示する表現形式であることと一致する。

次に、一章で挙げた、もう一つの問題がある例を、検討する。

- (22) (=6) ... she turned into a local café. ... She crossed the café, and made her way to an empty table ... *The waitress* drifted up. Mrs. Oliver ordered a cup of coffee and a Bath bun ...

- (23) (=7) ... we passed the threshold of *The George* (=レストラン)...

We were directed to the coffee-room ... *An elderly waiter* attended to us, a slow, heavy-breathing man. ...

(22)の“the waitress”, (23)の“an elderly waiter”は、置かれている状況は同じであるにもかかわらず、指示表現の形式が異なっている。

これも、指示表現の指示物が、現実の事物でなく、人間の意識に捉えられた実体であることにより、説明できる。(22)で指示される実体とは、“café”等、既存の他の実体との関連により、捉えられていて、意識への密着性がタイプ1という既知性を持つこととなっているため、定名詞句で指示されている。この人物は、カフェにおけるウエイトレスという視点からのみ捉えられている。これに対して、(23)で指示される実体は、レストラン等、既存の実体との関連で捉えられてはいない。よって既知性は、意識への密着性がタイプ0となり、この実体は不定名詞句で、指示されているのである。この二例が含まれる文脈の違いは、この説明を、裏付けるものとなっている。(22)のウエイトレスが、オリバー夫人の方へやって来て注文を受けるといふ、ウエイトレスとしての行為しかしないのに対し、(23)の人物は、“a slow, heavy-breathing man”という、ウエイターとしてより、一人の人間としての観察、描写を受け、またこの後には、探偵ポワロに情報を与えるという、ウエイターの枠を越えた行為まで行う。談話における人物の存在の仕方、捉えられ方の違いが、つまりは、言語使用者の意識における、実体の存在のしかたの違いが、指示表現の違いに反映しているのである。

結 び

以上、本稿では、従来から一般的に結びつけられてきた、実体—既知性—指示表現の構図を見直すために、まず実体と既知性の二項目を、おのおの、指示表現形式との関係において検討し、次に実体と既知性の関連性を検討した。

指示の対象となる実体とは、現実世界等に存在する事物とは異なり、言語使用者の意識内の存在であり、既知性は、こうした意識内の存在である実体に対して、備わるものである。また既知性は、実体の意識への密着性と、唯一性という、二つの要因から成る。三タイプの密着性と、唯一性のあるなしの組み合わせにより、指示表現の形式が、決定するのである。

言語使用者の意識内に存在する実体に対して既知性が備わり、そうした既知性を持つ実体が指示を受け、指示表現で表わされるということであるから、現実世界では同一の事物であっても、意識内では別個の異なる実体として存在し、おのおの異なる既知性を持ち、ひいては異なる、おのおのの既知性に対応した指示表現により指示を受けるということも起こり得ることになる。また、物理的に置かれている状況が同じ事物でも、これを指示する人間が異なる捉え方をすれば、異なる既知性を持つ実体として意識内に存在することになり、したがって、指示表現の形式も異なるものとなるのである。

註

1. 各例においては、問題となる名詞句を斜字体で示し、指数 i により、現実世界において、指示物の重なることを示した。
2. Higgins(1979)の『指示』の定義によれば、(11)の不定名詞句は、現実のアメリカに対し指示が成り立つことになる。彼は、名詞句が“referential”であるためには、指示物が存在し、名詞句により確かに示されなければならないとする。
3. 本稿で言う『意識』とは、Chafe(1976)で言う“consciousness”のことである。
4. 『役割』については、Fauconnier(1985)参照。
5. 既知性に関する多くの理論については、Prince(1981)に詳しく述べられている。
6. Minsky(1975)のフレーム、Schank(1975)のSCRIPTやエピソード、Prince(1981)のカプセル等は、こういった事物間の関係に関する理論である。

参考文献

- Anderson, A., S. C. Garrod & A. J. Sanford 1983. The accessibility of pronominal antecedents as a function of episode shifts in narrative text. *Quarterly Journal of Experimental Psychology* 35A.
- Chafe, W. 1976. Givenness, contrastiveness, definiteness, subjects, topics and point of view. C. Li(ed.), *Subject and Topic*. New York: Academic Press.
- Clancy, P. M. 1980. Referential choice in English and Japanese narrative discourse. W. L. Chafe (ed.) *The Pear Stories: Cognitive, Cultural and Linguistic Aspects of Narrative Production*. Norwood, N. J.: Ablex.
- Fauconnier, G. 1985. *Mental Spaces: Aspects of Meaning Construction in Natural Language*, The MIT Press.

- Garrod, S. & Sanford, T. 1988. Thematic Subjecthood and Cognitive Constraints on Discourse Structure. *Journal of Pragmatics* 12(1988).
- Higgins, F. R. 1979. *The Pseudo-Cleft Construction in English*. Garland Publishing, Inc.
- Hinds, J. 1977. Paragraph structure and pronominalization. *Papers in Linguistics* 10.
- Johnson-Laird, P. N. 1988. How is meaning mentally represented? *Meaning and Mental Representations*.
- Johnson-Laird, P. N. & A. Garnham 1980. Descriptions and discourse models. *Linguistics and Philosophy* 3 (1980).
- Kripke, S. 1977. Speaker's reference and semantic reference. *Midwest Studies in Philosophy, II*.
- Minsky, M. 1975. A Framework for representing knowledge. Winston, P. (ed.) , *The Psychology of Computer Vision*, New York : McGraw-Hill.
- Prince, E. F. 1981. Toward a taxonomy of Given-New information. P. Cole (ed.) *Radical Pragmatics*, Academic Press.
- Schank, R. C. 1975. The Structure of episodes in memory. D. G. Bobrow & A. Collins (eds.) *Representation and Understanding: Studies in Cognitive Science*, Academic Press.
- Segal, G. 1989. A Preference for Sense and Reference. *The Journal of Philosophy* vol. LXXXVI, No. 2.
- Stenning, K. 1978. Anaphora as an approach to pragmatics. M. Halle, J. Bresnan, & G. A. Miller (eds.), *Linguistic Theory and Psychological Reality*, Cambridge: The MIT Press.
- Yule, G. 1981. New, current and displaced entity reference. *Lingua* 55.

例文の出典

- Allen, W. 1972. *Without Feathers*. London : Sphere Books.
- Christie, A. 1937. *Dumb Witness*, Fontana.
- . 1966. *Third Girl*. London : Pan Books.
- Feigenbaum, E. A. 1983. *The Fifth Generation—Artificial Intelligence and Japan's Computer Challenge to the World*, London : Pan Books.
- Time, 21 Sep. 1987.
- . 15 Aug. 1988.
- . 22 Aug. 1988.
- . 16 Jan. 1989.

222

———. 13 Mar. 1989.